お彼岸　―　出遇いなおし　―

春の命の芽吹きに心弾むのは、それまで寒さの中で耐え忍んできたからでしょうか。冬をくぐり抜けた春のお彼岸には、よく祖母のことを思い出します。

祖母は穏やかで優しい人でした。そんな祖母が私のために本気で怒ってくれたことがありました。小学生の頃、友達にからかわれて泣きながら帰ってきた私を案じ、「うちの大事な祐三子を泣かせて！私が怒りにいってあげようかね」と、いつになく強い口調と眼差しでそう言ってくれたのです。私は慌てて「大丈夫だから。行かなくていいよ」と言いましたが、私のために怒ってくれていることがとても嬉しく、心が暖かくなったことを覚えています。その出来事は、今でも辛く悲しいことがあった時、私を支えてくれています。

その祖母が亡くなったのは、私が高校2年の時、反抗期なども重なり優しくない年頃でした。亡くなってから、「どうしてもっと祖母に優しくできなかったのか」と後悔ばかりしていました。その後、母から私が知らなかった祖母の話を聞く度に、祖母の人生というものが、いかに思い通りにいかないものであったのかと感じ、さらに「私の在り方が祖母を傷つけたこともあったのでは…」と心が痛みました。

生前の祖母は、本堂やお内仏だけでなく、歩きながら、またいろいろな場面で「ナンマンダブ　ナンマンダブ」と念仏を申しておりました。今となってはその真意は分かりませんが、きっと辛く思い悩むことの多い自らの在り方を、念仏に確かめていたように思われます。その姿は今を生きる私が、真宗の教えを聞かせていただくひとつの機縁になっています。

お彼岸は亡き方を思い出す大切な時です。そして、迷いや悩みを抱えるこの私が、仏さまの教えに導いてくださる諸仏となった亡き方と、出遇いなおすことができる時であるといただいています。

（犬飼　祐三子）